

子どもの権利と人間的成長としての教育 —デューイ教育理論の問うたもの—

川瀬八洲夫

(平成8年9月30日受理)

THE CHILD'S RIGHT AND THE EDUCATION AS HUMAN GROWTH —THINGS J, DEWEY WAS ASKING FOR THROUGH HIS EDUCATIONAL THEORY—

Yasuo KAWASE

(Received September 30, 1996)

はじめに

いま、教育の質・量の全面にわたって見直しが迫られ、教育の制度、内容、方法、評価などを中心として、教育の過程全体が問われている。子ども・青年の発達、人間的成長の成果の質が問われているのである。それは、これまでの受験中心の過当競争教育、学力の偏差値評価、一面的知的学力観、人間性教育の偏在(人間関係—ヒューマニティーの欠如、社会化の未発達、未熟と幼稚性、肥大化したエゴイズム、発達課題の不履行等々)などを中心にした現代教育への指弾を意味している。これまで中央教育審議会など数々の審議会答申が“ゆとりの教育”“個性尊重の教育”“人間性豊かな教育”“生きる学力の形成”などのキャッチフレーズのもとに教育改革の必要性を強調し、いろいろなプランを提案してきた。しかし基本的、理論的主張と現実の教育進行のギャップは埋まらず、教育改革の実はみのっていない。それは法制基準の曖昧さ、教育行政の不徹底さ、学校レベルでの受け止め、教師サイドの意識、意欲、実践の態度の諸問題が重なり合っただけの結果、教育改革の実がみのっていないのである。

デューイ(J. DEWEY)は1896年、哲学、人間—人間精神、心理学、教育—教育学理論などの抜本的な実験研究としての実験学校(シカゴ大学 DEWEY

SCHOOL)を創設した。これは当時の伝統的学校、教育内容とその構成理論、子ども・人間観と発達観、人間的成長論と心理学などの諸問題を根底から批判したものであった。そしてその再構成の理論・思想を、社会生活の場としての学校、生活・活動としてのカリキュラム、実験・経験としての教育方法論、科学としての思考理論、哲学の改造などとしてその思想を展開させたのである。これは実験学校の教育理論に関わって論述された「学校と社会」(THE SCHOOL AND SOCIETY)「思考の方法」(HOW WE THINK)「子どもとカリキュラム」(THE CHILD AND THE CURRICULUM)「民主主義と教育」(DEMOCRACY AND EDUCATION)などに鋭く指摘されている。ここで取り上げられ、問われている子どもの発達観と人間的成長論、活動と表現としてのカリキュラム構成観、個性を持つ子どもの経験・活動・実験としての教育方法論、理想的発達環境としての学校観などは、当時にあった時代批判、教育批判としてだけではなく、わが国の現代教育の矛盾、問題、課題にも厳しく迫っている。本稿では、このデューイ理論を探究しつつ、わが国の現代教育の問題、課題とは何か、子どもの人間的成長、教育内容構成論、教育過程の適切化にふれつつ、その根底を問うていきたい。

1 成長としての教育

デューイは子どもの身体、本能、興味、経験と習慣、知性、心理などのあらゆる観点から個性的、社会的成長・

2 子ども観

発達のための教育理論を探究した。さてデューイは、なによりも、成長としての教育論を主張した。この教育論について、教育とは子どもの成長をいつまでも可能にさせるように能力を組織的に訓練、指導すること⁽¹⁾。また、子どもたちにどこまでも断えざる成長の欲望をつくり出し、それを実際に有効にさせるための手段をどのようにあたえるかにあるなどと論じて⁽²⁾、教育を人間的成長の機能と役割を持つものとして捉えたのである。そして教育とは“発展”であるとデューイはいう⁽³⁾。この“発展”とは生命の成長、発展を意味しているのである。デューイにとっては、教育の過程は教育の過程以外の目的はなく、過程そのものが教育の目的なのである。そしてこの教育の過程とは不断の改造、改築、改組織であるとする。

デューイにとって教育とは年令の如何にかかわらず、常に子ども一人間の成長を可能ならしめるためのあらゆる条件を供給することなのである。したがって学校教育の目的は子ども一人間の成長・発展を可能ならせるように能力を組織的に育成し、教育的成長の継続を確実にさせることにほかならないとする⁽⁴⁾。学校教育の価値を判断する標準は教育が絶えまない成長の欲望をつくり出し、その欲望を実際に有効にならせるために、どのような手段を与えうるかによって、決められるとするのである。

デューイは教育が子ども・人間の成長の機能と役割であることを、また次の観点からも指摘する。教育では、子どもは出発点であり、中心であり、目標である。子どもの発達、成長は理想に向かってのものである。この発達や成長だけが教育の基準を供給する。子どもの成長にとって、すべての学習は追従する。もろもろの学習内容は、成長の要求に役立つものとして評価された道具なのである。人格、性格は教材より上のものである。知識とか、情報ではなく、ただ子どもの人間的発達、自己実現だけがその目標になる⁽⁵⁾。教育をする我々にとって必要なことは、子どもの現在発揮しているものや消失していくものの諸要素—子どもの能力と弱点が示されたものとして—を、それが各々持っている場のあるものより大きな成長過程の光に、照らして判断し評価しえるようなものである。我々はこのような方法によってのみ、教育のよい、悪いを識別することができる⁽⁶⁾。

このように、デューイは、教育というものの目的、内容、方法、成果などを、人間的成長の教育として論ずるのである。

不断に成長・発達しつづける子どもにそのための環境を整え、組織し、援助・指導・訓練を与える。そしてそのための教育論を展開させる。デューイはその子どもというものをどう観、捉えているのであろうか。彼の子どもの観の基本を考えてみよう。デューイは子どもとは、教育の問題として観ると、内から何かを引き出すという存在ではない。子どもはすでに走りまわり、ものをひっくり返し、あらゆる活動を始めている。子どもは、ある潜んでいる活動の芽生えを、おとながすこしずつ引き出すために多くの注意と熟練とをもって接近しなければならないという純粋な潜在的な存在ではない。子どもとはすでに激しく活動的であり、諸々の活動をする存在そのものなのである⁽⁷⁾。

子どもは、基本的原理としては、つねに自分自身の活動をもった存在なのである。この活動は、現在の切迫したものであって、「誘発され」「引き出され」「展開せられる」等々を必要としない能動的なものである⁽⁸⁾。

この子どもを心理学的にみれば、子どもとは本来、活動し、自己表現する存在なのである。彼の認識と感情の作用は彼の行動のおよぶ範囲で営まれるのが常識であって、行動から育ち、行動へと帰っていく。このような活動性は、純粋に精神的なものでもなければ、純粋に身体的なものでもない。それは運動を媒体とした表象表現を含んでいるものなのである⁽⁹⁾。

子どもは「なすことによって学ぶ」(learning by doing)のである。子どもは自分の観察、反省、観念の形成、吟味によってのみ、すでに自分の知っていることがらをより豊富にし、またこれ正すことができる。子どもの自己活動は単に、内的なもの、感覚器官、身体的運動器官の自由な活動だけではなく、いろいろなことを学んだり実験したりする機会。また自分の観念を事物や実際に適用、実験、吟味する機会。どんな材料や道具をもってことをなすのかを知ったり、発見したりする機会。いろいろな身体活動の自由。このような一連のことが整えられてはじめて真の自己活動が成される⁽¹⁰⁾と考える。デューイにとって自己活動とは子ども観の重要なキイ概念なのである。

子どもは活動の基本的、活動的エネルギーとして衝動(impulse)を持っている。この衝動は子どものあらゆる

る活動の潜在的な力で、いわば成長のバネともいうべきものである。この衝動は、社会的衝動 (the social impulse)、構成的衝動 (the constructive impulse)、探求的衝動 (the instinct impulse)、表現衝動 (the expressive impulse) など、このそれぞれは、談話・交際・コミュニケーション、子どもの内発的構成の努力が外在的イメージ・形へ、談話的衝動と構成的衝動の結合から発生。コミュニケーション本能と構成的衝動から生ずる一種の芸術的衝動ともいえる表現衝動などである。このことについては既にふれている通りである⁽¹¹⁾。この衝動に基づいて発動する興味について、デューイはいたる所で論じているが、特に「教育における興味と努力」(Interest and Effort in Education)で詳細に論じている。そこでは子どもにおける真の興味 (genuine interest) とはある対象や観念と自己とを行為を通して提携させることであり⁽¹²⁾、興味は子どもの発達のための訓練には欠かせない重要なものである。この興味の心理的性格は第一に活動的 (active)、投射的 (projective)、推進的 (propulsive) でダイナミックなものであり、第二には客観的 (an object of regard) なものとして捉えられるものであり、第三にそれはあくまでも個人的なものであって直接の関心 (direct concern) を示すものとして捉えられているものなのである⁽¹³⁾。

この重要な、興味の心理的決定的なことは興味が自己表現活動の一形式であるということである。そして興味とはその活動に結びつけられており、その活動の周囲に興味が集まる。それが自己発展を意味するのである⁽¹⁴⁾。

興味はすべての衝撃と習慣—その実現のために努力する人間を動かすに十分な力をもつ目標を生じさせる—から発するもので、これらはすべて行為においての確認、またそれゆえに自分の対象に関する欲求、努力、思考を示すものである。こうした興味の理論は子どもの発達、教育、教育の方法の基本的かつ重要な原理になるものである。そしてデューイは、教育的興味の類型として、1. 真の興味 (genuine interest) と教育的興味 (true educative interest) 2. 活動 (activity) 3. 身体的活動 (physical activity) 4. 構成的活動 (constructive activity) 5. 知的活動 (intellectual activity) 6. 社会的活動 (social activity) などをあげ、これらを教育方法の基礎として、また教育内容構成の基礎理論としたのである。

遊びについて、子どもにとって、遊びは重要な意味と

役割、機能を持っている。デューイは子どもの遊びについてはアメリカ進歩主義教育—新教育運動の歴史的な名著とされている「学校と社会」(THE SCHOOL AND SOCIETY)でフレーベル (F. FRÖBEL) の原理を引き合いに出している。遊びは、子どもが外面的になすことがらと同一なものと考えられてはならない。遊びは、むしろその全体性とその統一性において、子どもの精神的態度を示すものである。遊びは、子どもが自分のイメージと興味を何か満足できるような形に具現する際における子どもの全能力・全思想・あらゆる肉体的運動の自由な作用であり、相互作用なのである。遊びの持つ積極的意味は、子どもが最高に、十分に成長しきることになり、また子どもの芽生えつつある力を十分に実現しきることにある。このことを通じて不断に一つの平面から次の平面に発展させていくことを意味すると、そしてこのことはごく一般的で漠然たることの主張にすぎないが、これを具体化し、実際に適用した場合における意義は重大だと論ずる⁽¹⁵⁾。

この遊びは衝動—興味、自己活動と連携しつつ、重要な意味をもつものである。

作業 (work) について、作業は遊びと同じく、意識的な目的を持ち、目的を達するために材料や過程を選択し、それを目的に合うように適性化させる。この作業は遊びと同じ目的を持った活動ではあるが、作業には活動の過程に、より長く、より連続的注意が要求される。また手段を選んだり、つくったりすることにより一層多くの知恵を持つことが要求されるのである。

子どもは作業において、いろいろな材料を使いながら、道具を使ったりしながら、自分の手足、身体機能、感覚器官などすべてを使いながら、自分のイメージ、思想、観念などを観察し、思考し、実験する。子どもはこうした作業の過程で自己の精神、諸能力、態度、経験を陶冶してくのである⁽¹⁶⁾。子どもは以上のような特性を有している。子どもにはこれらに合う適性な訓練と指導 (direction)、教育が与えられなければならないのである。

3 教育過程論—カリキュラム観と教育方法論

教育内容—カリキュラム構成の基本的原理を、デューイの教育理論の原点をかたちづくる「教育学信条」(MY PEDAGOGIC CREED) やシカゴ実験学校の理論を中心に、その意味するものは何であったかを考え

てみよう。

デューイのカリキュラムの構成の原点は、彼の最も初期の教育学理論を端的に論じた「教育学信条」に明らかにされている。それによると、子どもの教育、学校教育上の訓練、成長の中心統合の基本は“社会生活”である。それゆえに諸教科の相関における真の中心は、理科(SCIENCE)でも文学でも歴史でも地理でもなく、子ども自身の社会的活動にある。したがって教育の本来の基礎は一般的構成活動に必要な諸力の形成にあるのである。それゆえにカリキュラムの基本的中心はいわゆる表現的ないし構成的活動でなければならないのである。デューイの哲学、人間、心理、教育の実験的研究として始められたシカゴ実験学校(DEWEY SCHOOL, 1896年)はこうした理論を基底に論じられ、つくられる。

さて実験学校のカリキュラムは、子どもにとって、静止したものではなく、子どもの成長と経験にともなって変化する欲求・興味に対応することが要求される。このための基本原理は、一つには子どもの活動欲求—周囲に反応して具体的表現を求める衝動であり、いま一つは子どもの表現を知的、社会的な形に導いていく材料の正負の条件をつくることに求められた。この二つが学校・カリキュラムの構成と“活動”を決めたのである。そして全体として教科内容と活動プログラムの関係に特に注意がはらわれていた⁽¹⁸⁾。カリキュラム構成の原理にはデューイの論ずる、四つの衝動—1. 社会的衝動、2. 構成的衝動、3. 探求的衝動、4. 表現的衝動—子どもの活動への自然なバネの適用が求められた。子どもの成長はこれらの実現にかかっている。それゆえカリキュラムづくりはこれらの潜在力を創造へと表出させる試みの歴史でもあった。実際のカリキュラム作成には 1. 学校での学習と過程を近隣の生活と活動にいかに関接に関連づけるか、2. 歴史、理科(SCIENCE)、芸術を子どもの現在の経験の中に積極的意味をもたせて導入できるか、3. どのようにして読む、書く、数の形式的シボルの学習を他の活動と関連づけるか、4. 子どもの集団をできるだけ小さく、教師の数はなるべく多くし、子どもの活動を組織的に見守る。そして一人ひとりの状態と発達にできるだけ注意することなどに原理をおいて、工夫したのである⁽¹⁹⁾。

教育方法論。デューイにとって、子どもはあらゆる教育的営みの中心である。教育は、子どもの本性—興味や衝動とそれが志向する目標との間の調整作用でもある。

したがって教育の方法とは、一人ひとりの子どもの学習や研究の方法であると考えた。デューイは教育の方法は子どもの行為の仕方そのものであり、また反応の仕方そのものであるという。いいかえれば教授法というものは子どもの問題解決における探求の方法をいかに助長するかの研究なのである。

デューイは教育方法の基本原理を「教育学信条」で明快に、端的に指摘している⁽²⁰⁾。教育方法の問題は研究的には、子どもの諸力や興味を発展させる順序の問題に還元できる。教育の内容を与えたり、取り扱っていく法則は、子ども自身の本性に内在する法則なのである。このためには、子どもの能動性を尊重し、表現、運動が意識や感覚器官より先行することの理解。観念、行動の手段の理解。イメージが授業の重要な道具であることへの理解。力の伸びていくことのしるしである諸々の興味に対する不断の共感的観察の必要性の理解。諸活動—情緒—行動の関連性の理解などが欠かせないことであるとした。

デューイの教育方法論、教授法の理論には、彼の思考理論が関わってくる。思考理論は彼の「思考の方法」(HOW WE THINK)に詳細に論じられている。彼の思考理論—主として反省的思考の形成・発達に基づいて、問題解決学習論が主張される。問題解決学習論は子どもの生活・興味・自己活動の原理などに関わって理論化された行動的な教授・学習理論である。デューイによると、思考は経験を超えたところにあるのではなく、実際の生活のなかでの問題解決のプロセスにおいての疑問、当惑、混乱、探求、発見の過程として起こってくるものである。したがって、思考とは具体的な行動、具体的な現象や事物に関わって生起するものなのである。これらにどう反応し、対処していくのかなどが思考の実際的な形姿なのである。こうした思考一般の中で、重要な意味と役割を持つのが、デューイのいう「反省的思考」(REFLECTIVE THINKING)なのである。反省的思考は思考のなかで最も重要なもので、目的をもった意識的活動をさせることや、いろいろなことがらに意味を与える、ことをなすことの準備をし、それを整え、知的に整えることなどを可能にするものである。反省的思考を可能にする基に好奇心、暗示、整理などを考えている⁽²¹⁾。

反省的思考は五つの段階(phase)を持つ。1. 困難の漠然とした自覚 2. 問題の中身の自覚 3. 解決への暗示、示唆 4. 解決への仮説、推論 5. 観察、実

験などによる検証である。これを教授の段階、すなわち—
1. 問題、課題の暗示 (suggestion) 2. 課題の知的
整理 (intellectualization) 3. 解決への仮説
(hypothesis) 4. 推論 (reasoning) 5. 行動によ
る解決—仮説の検証 (testing the hypothesis by
action) の各段階を基に教授過程をつくり⁽²²⁾、問題解
決学習論として展開させていったのである。

デューイ理論の実践として、実験学校の教育は展開さ
れたのであるが、ここでの教育方法論との関わりから心
理学的諸原理のいくつかが指摘されている⁽²³⁾。それによ
ると子どもは本来、活動し、自己表現する存在である。
彼の認識と感情作用は彼の行動のおよぶ範囲内で営まれ
るのが普通であって、行動から育ち、行動へと帰っていく
性格のものである。彼の知的な活動は表現活動に依存
している。その依存は感覚・知覚作用、観念作用に深く
関わっている。感情は表現活動に依存している。感情—
表現活動は興味の存在、遊び、作業などに深く関わっ
ている。こうした心理的諸原理との適切な兼ね合いのなか
で望ましい教育方法は実践されることが要求されている
のである。

実験学校は多様な活動を教育の内容にカリキュラムと
して取り入れている。子どもは生得的に、本能—衝動を
持っていて、それが断えざる好奇心・興味になり、彼等
に自己活動—遊び—作業などを積極的に展開させる。そ
の過程や結果に、彼らの要求・努力・満足感を満たし、
その結果として自己の経験の改造を進めていく。この過
程でいろいろなレベルでの知性・探求の展開をしていき、
一人ひとりの子どもの発達、人間的成長を促していくの
である。デューイは、学校教育の最重要課題は、カリキュ
ラム—教材、教育方法—教授法、教育的管理の三位一体
にあると主張する⁽²⁴⁾。この教育方法の本質の要点とし
て、1. 子どもは真の経験的ことがらを持つこと—自分
自身に興味ある連続した活動に参加 2. この経験のな
かに真の問題が在り、思考の刺激を得ること 3. 子ど
もはその問題を取り扱うのに必要な知識を持ち、観察を
すること 4. 子ども自身が責任を負って秩序的にその
解決を組み立ててゆくような解決の暗示があるようにす
ること 5. 子どもがその実際の経験のなかに自分の問
題を吟味し、その意味を明らかにすること。そして子ど
もにそのことの真偽を発見させる機会と動機を与えるこ
となどをあげ⁽²⁵⁾、子どものための真の適切な教育方法
論の成立条件を設定したのであった。

4 結びに—デューイ教育哲学にふれて

デューイは20世紀のアメリカ、西欧を代表する哲学者
であり、思想家であり、社会学者である。彼はギリシャ
哲学から出発し、ドイツ哲学、プラグマチズムの哲学な
どの近、現代の哲学の多くに貢献してきた。彼の理論、
思想の独自の体系はそれ自身としても膨大であるが、そ
の多くが人間—存在—形成—変革—教育—教育学理論に
関連づけられていた。彼はいう。社会的理想および方法
の改造、哲学の改造、教育の改造はどこまでも相提携す
るものである。もし従来の哲学系統の基礎的観念の修正
を要求するものであるとすれば、それは科学の進歩や、
産業革命や、民主主義の発達などに伴って、社会生活が
徹底的に変化したためにほかならない。このような実際
生活の変化は、その変化に適応するように教育の改造を
要求しなければならないと⁽²⁶⁾。彼は教育哲学の意味、
役割について、つぎのようにいう。教育哲学は既成出来
合いの思想観念を、根本的に起源と目的を異にする実行
の問題に、外的に適用しようとするものではない。それは
現代社会生活の諸問題に関して、正しい知的ならびに
道義的習慣の形成という問題を明白に組織だてるもので
あるとする⁽²⁷⁾。また教育が自然および人間—人類に対
するわれわれの根本的な知的ならびに情的態度を形成す
る過程であると見るならば、哲学はすなわち教育の一般
的原理にならなければならないと主張している。

さてデューイはアメリカ新教育運動の理論、運動、組
織などに大きな影響を与えていた。デューイは彼の教育、
哲学理論の構成において、伝統的なものの見方、考え方、
すなわち独断的な権威制度、形式、偏見、思考、認識、
態度等々についてきびしく指弾していたのであった⁽²⁸⁾。
このための思考の方法の基本原理は実験主義的論理、認
識であった。デューイによれば実験的方法による認識の
しかたは、それまでの認識論の改造を促したものであっ
た。これは一つには、活動—ある事物—物理的变化—そ
の変化と思想の一致の認識をもって、正当な知識とし得
ること。いま一つは経験—現在状態の観察—結果—予測—
計画といったことに対する認識を意味している。そして
こうした考え方に立ってデューイの認識、思考理論が展
開される。この思考理論の形成はすでにふれた「思考の
方法」(HOW WE THINK)で展開されたものであっ
た。そしてこの考察、認識、思考、実践のパラダイムが
基本になって、実験主義教育の展開へと発展したのであ

- た。
- これまでに取り上げてきたデューイの子ども観，教育理論は，子ども・人間の本来的要求と発達契機，それに基づく人間の成長の科学的理論の形成。またこのための人間教育—教育の内容・方法・評価・心理などの具体的な処方箋でもある。いま，我が国における子ども・青年の発達特性や発達の諸問題はいろいろな側面から注視されている。
- これまでに考察してきたデューイの学校，教育理論から，本稿のはじめにふれたような課題への対応，それへの示唆が多角的に得られるのではないかと考える。
- 注1 J, DEWEY : DEMOCRACY AND EDUCATION, THE MACMILLAN COMPANY P.51
- 同2 同1 P.53
- 同3 同1 PP.53—54
- 同4 同1 PP.53—55
- 同5 J, DEWEY : THE CHILD AND THE CURRICULUM, THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS PHOENIX BOOK P.9
- 同6 同5 P.14
- 同7 J, DEWEY : THE SCHOOL AND SOCIETY, UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS P.36
- 同8 大浦猛編「実験学校の理論—デューイ」明治図書世界教育学選集 P.88
- 同9 同8 P.162
- 同10 同1 CHAP, II
- 同11 同7 PP.43—44
- 同12 J, DEWEY : INTEREST AND EFFORT IN EDUCATION, AUGUSTUS M, KELLY PUBLISHERS P.14
- 同13 同12 P.16
- 同14 同12 P.22
- 同15 J, DEWEY : THE SCHOOL AND SOCIETY, THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS PP.118—119
- 同16 J, DEWEY : DEMOCRACY AND EDUCATION, THE MACMILLAN COMPANY CHAP, XV
- 同17 同8 PP.16—18
- 同18 DEPENDICIER : THE HISTORY OF THE LABORATORY SCHOOLS, THE LABORATORY SCHOOLS OF THE UNIVERSITY OF CHICAGO, CHICAGO QUADRANGLE BOOK PP.19—21
- 同19 同18 PP.20—21
- 同20 J, DEWEY : MY PEDAGOGIC CREED. DEWEY ON EDUCATION SELECTED WRITINGS THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS PP.435—437
- 同21 J, DEWEY : HOW WE THINK, HENRY REGNEY COMPANY A GATEWAY EDITION P.12
- 同22 同21 PP.107—116
- 同23 同8 PP.161—166
- 同24 J, DEWEY : DEMOCRACY AND EDUCATION, THE MACMILLAN COMPANY CHAP, VIⅢ
- 同25 同24 CHAP, XⅡ
- 同26 同24 CHAP, II XⅣ
- 同27 同24 CHAP, II XⅣ
- 同28 同 J, DEWEY : THE SCHOOL AND SOCIETY, THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS P.34